

尿沈渣検査が臨床診断に有用であった症例

ループス腎炎治療中に扁平上皮癌が疑われた1例

◎川満 紀子¹⁾、白濱 早紀¹⁾、上田 沙央理¹⁾、堀田 多恵子¹⁾
国立大学法人 九州大学病院¹⁾

【はじめに】尿沈渣検査では検出される成分より泌尿器疾患または腎疾患か、臨床病態を推測することができる。今回、糸球体型赤血球や多彩な円柱の検出で糸球体性疾患の尿沈渣像を呈していたが、尿沈渣検査から婦人科疾患の併発を疑い診断に寄与できた症例を経験したので報告する。

【症例】40歳代女性。20歳ごろに蝶型紅斑、関節痛、免疫異常、腎障害を認め、ループス腎炎と診断された。以後、ステロイド、免疫抑制剤の服用で良好にコントロールされていたが、20XX年7月より内服を自己中断しており、全身浮腫、蛋白尿を指摘され、ループス腎炎増悪が考えられ、当科入院となった。

【検査所見】尿定性：比重 1.018、pH 5.5、蛋白 (4+)、糖 (-)、潜血 (3+)、白血球反応 (1+) 尿沈渣：赤血球 50-99/HPF (糸球体型赤血球大部分)、白血球 20-29/HPF、扁平上皮細胞 1-4/HPF、尿細管上皮細胞 1-4/HPF、顆粒円柱 20-29/WF、脂肪円柱 1-4/WF、赤血球円柱 5-9/WF、白血球円柱 20-29/WF であった。多彩な尿沈渣像の中、ポドサイトを示唆する上皮細胞 5-7/WF が散見された。また入院経

過中に時折、細胞質が均質状であり、N/C 比高く単核または2核の小円形細胞や有尾状を呈した細胞が認められ悪性が疑われた。

【経過】細胞診検査の追加と外陰部からのコンタミネーションも考え婦人科受診を依頼した。子宮頸部細胞診、病理組織検査、子宮頸部 MRI 検査より子宮頸癌 IB 期と診断された。その後、子宮全摘出が施行され経過良好となった。ループス腎炎の治療も継続し、腎機能も安定した経過を辿っている。

【考察とまとめ】本症例で認めた扁平上皮癌細胞は、小型の小円形細胞や有尾状を呈しており細胞質は透明感があること、また腎障害もあることから単独で出現した類円形型の尿細管上皮細胞やポドサイトが鑑別にあがり判断に苦慮した。しかし詳細な尿沈渣の観察と電話報告により臨床が予期していなかった疾患の早期診断に貢献することができたと考える。【謝辞】本症例におきましてご指導いただきました九州大学病院免疫・膠原病・感染症内科助教小野伸之先生に深謝致します。連絡先：092-642-5742